源氏物語

御法

紫式部

與謝野晶子訳

なほ春のましろき花と見ゆれどもともに死ぬまで悲しかりけり　（晶子）

紫夫人はあの大病以後病身になって、どこということもなく始終煩（わずら）っていた。たいした悪い容体になるのではなかったが、すぐれない、同じような不健康さが一年余りも続いた今では目に立って弱々しい姿になったことで、院は非常に心痛をしておいでになった。しばらくでもこの人の死んだあとのこの世にいるのは悲しいことであろうと知っておいでになったし、夫人

自身も人生の幸福には不足を感じるところとてもなく、気がかりな思いの残る子もない人なのであるから、こまやかに思い合った過去を持っていて自分の先に欠けてしまうことは、院をどんなに不幸なお心持ちにすることであろうという点だけを心の中で物哀れに感じているのであった。未来の世のためにと思って夫人は功徳になることを多くしながらも、やはり出家して今後しばらくでも命のある間は仏勤めを十分にしたいということを始終院へお話しして、夫人は許しを得たがっているのであるが、院は御同意をあそばさなかった。それは院御自身にも出家は希望していられることなの

であるが、夫人が熱心にそうしたいと言っている時に、御自身もいっしょにそれを断行しようかというお心もないではないものの、いったん仏道にはいった以上は、仮にもこの世を顧みることはしたくないというお考えで、未来の世では一つの蓮華(れんげ)の上に安住しようと約束しておいでになる御夫婦であっても、この世での出家後の生活は全然区別を立てたものにせねばならぬという御本意から、こうして病弱な身体(からだ)になってしまった夫人と、離れておしまいになることは気がかりで、悟道にはいった新生活も内から破れていくことを院は恐れて躊躇(ちゅうちょ)をしておいでになるのである。結局は深い

考えもなく簡単に出家してしまう人よりも、道にはいることが遅れるわけである。院の同意されぬのを見ぬ顔にして尼になってしまうことも見苦しいことであるし、自分の心にも満足のできぬことであろうからと思って、この点で夫人は院をお恨めしく思った。また自分自身も前生の罪の深いものであろうと不安がりもした。以前から自身の願（がん）果たしのために書かせてあった千部の法華（ほけ）経の供養を夫人はこの際することとした。自邸のような気のする二条の院でこの催しをすることにした。七僧の法服をはじめとして、以下の僧へ等差をつけて纏頭（てんとう）にする僧服類をことに精撰して夫人は作

らせてあった。そのほかのすべてのことにも費用を惜しまぬ行き届いた仏事の準備ができているのである。内輪(うちわ)事のように言っていたので、院はみずから計画に参加あそばさなかったが、女の催しでこれほど手落ちなく事の運ばれることは珍しいほどに万事のととのったのをお知りになって、仏道のほうにも深い理解のあることで夫人をうれしく思召した院は、御自身の手ではただ来賓を饗応(きょうおう)する座敷の装飾その他のことだけをおさせになった。音楽舞曲のほうのことは左大将が好意で世話をした。宮中、東宮、院の后(きさき)の宮、中宮(ちゅうぐう)をはじめとして、法事へ諸家からの誦経(ずきょう)の寄進、捧(ささ)げ

物なども大がかりなものが多いばかりでなく、この法会（ほうえ）に志を現わしたいと願わない世人もない有様であったから、華麗な仏会の式場が現出したわけである。いつの間にこの大部の経巻等を夫人が仕度（したく）したかと参列者は皆驚いた。長い年月を使った夫人の志に敬服したのである。花散里（はなちるさと）夫人、明石（あかし）夫人なども来会した。南と東の戸をあけて夫人は聴聞の席にした。それは寝殿の西の内蔵（うちぐら）であった。北側の部屋（へや）に各夫人の席を襖子（からかみ）だけの隔てで設けてあった。

三月の十日であったから花の真盛（まっさか）りである。天気もうららかで暖かい日なので、快くて御仏（みほとけ）のおいでにな

る世界に近い感じもすることから、あさはかな人たちすらも思わず信仰にはいる機縁を得そうであった。薪(たきぎ)こる（法華(ほけ)経はいかにして得し薪こり菜摘み水汲(く)みかくしてぞ得し）歌を同音に人々が唱える声の終わって、今までと反対に式場の静まりかえる気分は物哀れなものであるが、まして病になっている夫人の心は寂しくてならなかった。明石夫人の所へ女王(にょおう)は三の宮にお持たせして次の歌を贈った。

惜しからぬこの身ながらも限りとて薪(たきぎ)尽きなん
ことの悲しさ

夫人の心細い気持ちに共鳴したふうのものを返しにしては、認識不足を人から譏(そし)られることであろうと思って、明石はそれに触れなかった。

薪こる思ひは今日を初めにてこの世に願ふ法(のり)ぞはるけき

経声も楽音も混じっておもしろく夜は明けていくのであった。朝ぼらけの靄(もや)の間にはいろいろの花の木がなお女王の心を春に惹(ひ)きとどめようと絢爛(けんらん)の美を競っ

ていたし春の小鳥のさえずりも笛の声に劣らぬ気がして、身にしむこともおもしろさもきわまるかと思われるころに、「陵王（りょうおう）」が舞われて、殿上の貴紳たちが舞い人へ肩から脱いで与える纏頭（てんとう）の衣服の色彩などもこの朝はただ美しくばかり思われた。親王がた、高官らも音楽に名のある人はみずからその芸を惜しまずこの場で見せて遊んだ。上から下まで来会者が歓楽に酔っているのを見ても、余命の少ないことを知っている夫人の心だけは悲しかった。

昨日は例外に終日起きていたせいか夫人は苦しがって横になっていた。これまでこうしたおりごとに必ず

集まって来て、音楽舞楽の何かの一役を勤める人たちの容貌（ようぼう）や風采（ふうさい）にも、その芸にも逢（あ）うことが今日で終わるのかというようなことばかりが思われる夫人であったから、平生は注意の払われない顔も目にとまって、少しのことにも物哀れな気持ちが誘われて来賓席を夫人は見渡しているのであった。まして四季の遊び事に競争心は必ずあっても、さすがに長くつちかわれた友情というもののあった夫人たちに対しては、だれも永久に生き残る人はないであろうが、まず自分一人がこの中から消えていくのであると思われるのが女王の心に悲しかった。宴が終わってそれぞれの夫人が帰って

行く時なども、生死の別れほど別れが惜しまれた。花散里夫人の所へ、

　　絶えぬべき御法（みのり）ながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中
　　の契りを

と書いて紫の女王は送った。

　　結びおく契りは絶えじおほかたの残り少なき御法
　　なりとも

これは返事である。供養に続いて不断の読経（どきょう）、懺法（せんぼう）などもこの二条の院で院はおさせになるのであった。祈禱（きとう）は常におさせになっていたが、たいした効果も見えないために、わざわざ遠い寺々などでさせることにもお計らいになった。

　夏になると夫人は暑気のためにも死ぬようになることが多かった。病名も定まらぬ程度のものであるが、ただ衰弱がひどかった。堪えがたい苦しみをするというのでもない。女房たちの心にも、どうおなりになるのであろう、このまま危篤になっておしまいになるのではなかろうかという不安が生じてきて、惜しく悲し

くばかりそれらの人々も思って歎いていた。こんなふうであったから院は中宮を御所から二条の院へ退出おさせになった。当分東の対（たい）にお住みになるはずであったから、いったんこの西の対へおはいりになることにより、お迎えの儀式なども定例どおりにしていながらも、この宮のますますお栄えになる未来の日までを見ずに終わるかというように夫人は悲しんだ。お供をして来た役人たちの姓名の披露（ひろう）される時にも、だれがいる、かれも来ていると、女王は深く耳にとまる気がした。高官たちも多数に来ていたのである。しばらくぶりに、実母子以上の愛情が相互にある二人の女性はし

めやかに語り合っておいでになった。院がはいってお いでになったが、

「今夜は巣を追われた鳥のようでかわいそうな私はどこかで寝ることにしよう」

と言って、他の室（へや）へ行っておしまいになった。起きていた夫人の姿を御覧になったことがおうれしそうであったが、それはしいてよいように見てみずから慰めておいでになるのにすぎないのである。

「離れた所では、こちらからあちらへ歩いてお帰りになることがたいへんですし、私もまたあちらへ上がることはもうできなくなっていますから」

と夫人は言っていて、中宮はしばらくこの病室のあるほうの対におとどまりになることになった。明石(あかし)夫人もこちらへ来てしんみりとした会話が日々かわされた。女王の心の中では頼みたく、言っておきたく思うことが幾つかあったが、賢そうに死後のことを今から言うように取られるのを恥じて、そうした問題には触れないのであった。ただ人生のはかなさをおおように、言葉少なに、しかも軽々しくはなしに話すのが、露骨に死期の近いことを言うよりもどんなに心細い気持ちでいるかを思わせた。女王(にょうおう)は孫である宮たちを見ても、

「あなたがたがどうおなりになるだろうと、将来が見たいような気がしましたのも、私のようにつまらない者でいながら、知らず知らず命を惜しんでいたわけでしょうか」

こんなことを言って涙ぐむその顔が非常に美しかった。なぜそんなふうにばかり感ぜられるのであろうとお思いになって、中宮はお泣きになった。遺言のようにはせず話の中などで時々、

「長く私に仕えてくれました人たちの中で、たいした身寄りのないようなかわいそうなだれだれなどを、私がいなくなりましたあとで、あなたから気をつけて

やってくださいﾞ」

などというほどにしか死後のことは言わないのであ
る。

病室で読経(どきょう)の始められる日になってから中宮は東の
対へお移りになった。三の宮は幾人もの宮様がたの中
にことに愛らしいお姿でそばへ遊びにおいでになるの
を、病苦の薄らいだ時などに女王は前へおすわらせし
て、女房たちの聞いていないのを見ると、

「私がいなくなりましたら、あなたは思い出してくだ
さるでしょうね」

などと言うのであったが、宮は、

「恋しいでしょう。私は御所の陛下よりも中宮様よりもお祖母（ばあ）様が好きなんだ。いらっしゃらなくなったら私は悲しいでしょうよ」

とお言いになって、目をこすって涙を紛らしておいでになる宮のお姿のおかわいいために、夫人は微笑をして見ているのであったが、目からは涙がこぼれた。

「あなたが大人におなりになったら、ここへお住みになって、この対の前の紅梅と桜とは花の時分に十分愛しておながめなさいね。時々はまた仏様へもお供えになってね」

と言うと、宮はおうなずきになりながら、夫人の顔

を見守っておいでになったが、涙が落ちそうになったので、立ってお行きになった。手もとでお育てしたために夫人はこの宮と姫君にお別れすることをことに悲しく思っていた。

　ようやく秋が来て京の中も涼しくなると、紫夫人の病気も少し快くなったようには見えるのであるが、どうかするとまたもとのような容体にかえるのであった。まだ身にしむほどの秋風が吹くのではないが、しめっぽく曇る心をばかり持って夫人は日を送った。中宮（ちゅうぐう）は御所へおはいりにならず、もう少しここにおいでになるほうがよいことになるでしょうと女王はお言いし

たいのであるが、死期を予感しているように賢がって聞こえぬかと恥ずかしく思われもしたし、御所からの御催促の御使（みつか）いのひっきりなしに来ることに御遠慮がされもして、おとどめすることも申さないでいるうちに、夫人がもう東の対へ出て来ることができないために、宮のほうからそちらへ行こうと中宮が仰せられた。

失礼であると思い心苦しく思いながらも、お目にかからないでいることも悲しくて、西の対へ宮のお居間を設けさせて、夫人はなつかしい宮をお迎えしたのであった。夫人は非常に痩（や）せてしまったが、かえってこれが上品で、最も艶（えん）な姿になったように思われた。こ

れまであまりにはなやかであった盛りの時は、花などに比べて見られたものであるが、今は限りもない美の域に達して比較するものはもう地上になかった。その人が人生をはかなく、心細く思っている様子は、見るものの心をまでなんとなく悲しいものにさせた。

風がすごく吹く日の夕方に、前の庭をながめるために、夫人は起きて脇息（きょうそく）によりかかっているのを、おりからおいでになった院が御覧になって、

「今日はそんなに起きていられるのですね。宮がおいでになる時にだけ気分が晴れやかになるようですね」

とお言いになった。わずかに小康を得ているだけの

ことにも喜んでおいでになる院のお気持ちが、夫人には心苦しくて、この命がいよいよ終わった時にはどれほどお悲しみになるであろうと思うと物哀れになって、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩の上露

と言った。そのとおりに折れ返った萩の枝にとどまっているべくもない露にその命を比べたのであったし、時もまた秋風の立っている悲しい夕べであったから、

ややもせば消えを争ふ露の世に後（おく）れ先きだつ程（ほど）へ
ずもがな

とお言いになる院は、涙をお隠しになる余裕もないふうでおありになった。宮は、

秋風にしばし留まらぬ露の世をたれか草葉の上と
のみ見ん

とお告げになるのであった。美貌（びぼう）の二女性が最も親

しい家族として一堂に会することが快心のことであるにつけても、こうして千年を過ごす方法はないかと院はお思われになるのであったが、命は何の力でもとどめがたいものであるのは悲しい事実である。
「もうあちらへおいでなさいね。私は気分が悪くなってまいりました。病中と申してもあまり失礼ですから」
といって、女王は几帳(きちょう)を引き寄せて横になるのであったが、平生に超(こ)えて心細い様子であるために、どんな気持ちがするのかと不安に思召(おぼしめ)して、宮は手をおとらえになって泣く泣く母君を見ておいでになったが、

あの最後の歌の露が消えてゆくように終焉（しゅうえん）の迫ってきたことが明らかになったので、誦経（ずきょう）の使いが寺々へ数も知らずつかわされ、院内は騒ぎ立った。以前も一度こんなふうになった夫人が蘇生（そせい）した例のあることによって、物怪（もののけ）のすることかと院はお疑いになって、夜通しさまざまのことを試みさせられたが、かいもなくて翌朝の未明にまったくこと切れてしまった。

宮もお居間にお帰りにならぬままで臨終に立ち会えたことを、うれしくも悲しくも思召した。御良人（ごりょうじん）も御娘（みむすめ）も、これを人生の常としてだれも経験していることとはお思いになれないで、言語に絶した悲しみ方を

しておいでになるのである。二条の院の中は絶望して心を取り乱した人ばかりになった。院はお心の静めようもないふうで、大将を几帳のそばへお呼び寄せになって、

「もうだめになったことは確かなようだ。長く希望していた出家のことをこの際に遂げさせてやらないのは惨酷なように思われるが、加持に来ていた僧たちも読経（どきょう）の僧たちも皆することをやめて帰ったとしても、少しは残っているのもあろうから、この世の利益はもう必要がなくなった今では冥土（めいど）のお手引きに仏をお願いすることにして、髪を切って尼にすることをそのだ

れかにさせてくれ。相当な僧ではだれが残っているか」

こうお言いになる御様子にも、自制しておいでになるのであろうが、御血色もまったくないようで、涙がとまらず流れているお顔を、ごもっともなことであると大将は悲しく見た。

「物怪などが周囲の者を驚かすために、そうしたことをすることもあるのですが、絶望の御状態とはそうしたわけではないのでございましょうか。それでございましたら、ただ今承りましたことは結構なことでございまして、一日一夜でも道におはいりになっただけの

ことは報いられるでしょうが、しかしもうまったくお亡（な）くなりになったのでございましたら、死後のお髪（ぐし）の形を変えますだけのことがあの世の光にはならないでしょう。そして眼（め）で見る遺族たちの悲しみだけが増大することになるだけのことでございますから、私はいかがかと存じます」

　と大将は言って、忌中をこの院でこもり続けようとする志のある僧たちの中から人選して念仏をさせることを命じたりすることなども皆この人がした。今日までだいそれた恋の心をいだくというのではなかったが、どんな時にまたあの野分（のわき）の夕べに隙見（すきみ）を遂げた程度に

でも、また美しい継母が見られるのであろう、声すらも聞かれぬ運命で自分は終わるのであろうかというあこがれだけは念頭から去らなかったものであるが、声だけは永遠に聞かせてもらえない宿命であったとしても、遺骸（いがい）になった人にせよもう一度見る機会は今この時以外にあるわけもないと夕霧は思うと、声も立てて泣かれてしまうのであった。

　あるだけの女房は皆泣き騒いでいるのを、

「少し静かに、しばらく静かに」

と制するようにして、ものを言う間に几帳の垂れ絹を手で上げて見たが、まだほのぼのとしはじめたばか

りの夜明けの光でよく見えないために、灯（ひ）を近くへ寄せてうかがうと、麗人の女王（にょうおう）は遺骸になってなお美しくきれいで、その顔を大将がのぞいていても隠そうとする心はもう残っていなかった。院は、

「このとおりにまだなんら変わったところはないが、生きた人でないことだけはだれにもわかるではないか」

こうお言いになって、袖（そで）で顔をおさえておいでになるのを見ては、大将もしきりに涙がこぼれて、目も見えないのを、しいて引きあけて、遺骸をながめることをしたがかえって悲しみは増してくるばかりで、気も

失うのではないかと夕霧はみずから思った。横にむぞうさになびけた髪が豊かで、清らかで、少しのもつれもなくつやつやとして美しい。明るい灯のもとに顔の色は白く光るようで、生きた佳人の、人から見られぬよう見られぬようと願う心の休みなく働いているのよりも、己(おのれ)をあやぶむことも、他を疑うこともない純粋なふうで寝ている美女の魅力は大きかった。少々の欠点があってもなお夕霧の心は恍惚(こうこつ)としていたであろうが、見れば見るほど故人の美貌(びぼう)の完全であることが認識されるばかりであったから、この自分を離れてしまうような気持ちのする心はそのままこの遺骸にとど

まってしまうのではないかというような奇妙なことも夕霧は思った。

　長く仕えていた女房の中に意識の確かにあるような者はない状態であったから、院は非常に悲しい気持ちをしいておしずめになって、遺骸の始末などをあそばすのであった。昔も愛人や妻の死におあいになった経験はおありになっても、まだこんなことまでも手ずから世話あそばされたことはなかったから、自身としては空前絶後の悲しみであると見ておいでになるのであった。紫の女王の遺骸はその日のうちに納棺された。どれほど愛すればとて遺骸は遺骸として葬送せねばな

らぬのが人生の悲しい掟(おきて)であった。

はるばると広い野にあいた場所がないほどにも葬送の人の集まったいかめしい儀式であったが、送られた人ははかない煙になって間もなく立ち昇(のぼ)ってしまった。当然のことではあるがこれをも人々は悲しんだ。空を歩いているような気持ちで院は人によりかかって足を運んでおいでになるのを見ては、あの高貴な御身分でと低級な頭のものさえも御同情して泣かない者はなかった。遺骸の供をして来た女房たちはまして夢の中に彷徨(ほうこう)しているような気持ちになっていて、車から転(ころ)び落ちそうに見えるのを従者たちは扱いかねていた。

昔、大将の母君の葵(あおい)夫人の葬送の夜明けのことを院は思い出しておいでになったが、その時はなお月の形が明瞭(めいりょう)に見えた御記憶があった。今は心も目も暗闇(くらやみ)のうちのような気のあそばされる院でおありになった。女王は十四日に薨去(こうきょ)したのであって、これは十五日の夜明けのことである。

はなやかな日が上って、野原一面に置き渡した露がすみずみまできらめく所をお通りになりながら、院はいっそうこの時人生というものをいとわしく悲しく思召して、残った自分の命といっても、もう長くは保ちえられるものではないであろうから、こうした苦しみ

を見る時に、昔からの希望であった出家も遂げたいとしきりにお思われになるのであったが、気の弱さを史上に残すことが顧慮されて、当分はこのままで忍ぶほかはないと御決心はあそばされても、なお胸の悲しみはせき上がってくるのであった。

夕霧も、紫夫人の忌中を二条院にこもることにして、かりそめにも出かけるようなことはなく、明け暮れ院のおそばにいて、心苦しい御悲歎（ひたん）をもっともなことであると御同情をして見ながら、いろいろと、お慰めの言葉を尽くしていた。

風が野分（のわき）ふうに吹く夕方に、大将は昔のことを思い

出して、ほのかにだけは見ることができた人だったのにと、過ぎ去った秋の夕べが恋しく思われるとともに、また麗人の終わりの姿を見て夢のようであったことも人知れず忍んでいると非常に悲しくなるのを、人目に怪しまれまいとする紛らわしには、阿弥陀仏（あみだぶつ）、阿弥陀仏と唱えて数珠（じゅず）の緒を繰ることをした。涙の玉も混ぜてである。

いにしへの秋の夕べの恋しきに今はと見えし明け
暗（ぐ）れの夢

この夢の酔いごこちは永遠の悲しみの澱（おり）を大将の胸に残したようである。りっぱな僧たちを集めて忌籠（いみごも）りの念仏をさせることは普通であるが、なおそのほかに法華（ほけ）経をも院がお読ませになっているのも両様の悲哀を招く声のように聞こえた。

　寝ても起きても涙のかわくまもなく目はいつも霧におおわれたお気持ちで院は日を送っておいでになった。一生を回顧してごらんになると、鏡に写る容貌（ようぼう）をはじめとして恵まれた人物として世に登場したことは確かであるが、幼年時代からすでに人生の無常を悟らせられるようなことが次々周囲に起こって、これによって

仏道へはいれと仏の促（うなが）すのをしいて知らぬふうに世の中から離脱することのできなかったために、過去にも未来にもこんなことがあろうとは思われぬ大なる悲しみを体験させられることになった、これほど悲しみのしずめがたい心を持っている間は、仏の道にもはいることは不可能であろうとみずからおあやぶまれになる院は、この心持ちを少しゆるやかにされたいと阿弥陀仏を念じておいでになった。

忌中の院をお見舞いになるかたがたは宮中をはじめとして、皆形式的ではなくたびたびの使いをおつかわしになるのであった。仏道から言えばいっさいのこと

は院の御念頭から除けられてよいわけではあるが、さすがに悲しみにぼけたふうには人から見られたくない、こうした一生の末になって妻を失った悲しみに堪えないで入道したという名の残ることだけははばかっておいでになるために、見えぬ拘束を受けて自由に出家のおできにならぬこともこのごろの悲しみに添った一つの悲しみになった。

　太政大臣は人が不幸であるおりに傍観していられぬ性質であったから、紫夫人というような不世出の佳人の突然に死んだことを惜しがり、院に御同情してたびたび見舞いの手紙をお送りした。昔大将の母君が亡く

なったのも秋のこのごろのことであったと思い出して、大臣は当時の悲しみもまた心の中に湧き出してくるのであったが、その時に妹の死を惜しんだ人たちも多くすでに故人になっている、先立つということも、後れるということもたいした差のない時間のことではないかなどと考えて、もののしんみりと感ぜられる夕方に庭をながめていた。息子の蔵人少将を使いにして六条院へ手紙を持たせてあげた。人生の悲しみをいろいろと言って、古い親友をお慰めする長い文章の書かれてある端のほうに、

古(いにし)への秋さへ今のここちして濡(ぬ)れにし袖(そで)に露ぞ
置き添ふ

という歌もあった。ちょうど院も、過去になったいろいろな場合を思い出しておいでになる時であったから、大臣の言う昔の秋も、早く死別した妻のことも皆一つの恋しさになって流れてくる涙の中で返事をお書きになるのであった。

露けさは昔今とも思ほえずおほかた秋の世こそつらけれ

悲しいことだけを書いておいては、あまりに弱いことであると批難するであろう、大臣の性格を知っておいでになる院は御注意をみずからあそばして、たびたび厚意のある御慰問を受けているといって、悦びの言葉などもお書き加えになるのをお忘れにならなかった。

薄墨色を着ると葵夫人の死んだ時にお歌いになったその喪服よりも、今度は少し濃い色のを着て悲しみを示された。

どんな幸運に恵まれていても、理由のない世間の

嫉妬（しっと）を受けることがあるものであるし、またその人自身にも驕慢（きょうまん）な心ができてそのために人の苦しめられる人もあるのであるが、紫の女王という人は不思議なほどの人気があって、何につけても渇仰（かつごう）され、ほめられる唯一の瑕（きず）のない珠（たま）のような存在であり、善良な貴女（きじょ）であったのであるから、たいした関係のない世間一般の人たちまでも今年の秋は虫の声にも、風の音にも、また得がたいこの世の宝を失った悲しみに誘われて、涙を落とさない者はないのである。ましてほのかにでも女王を見たことのある人たちにとって、女王を失った悲しみはとうてい忘られるものではなかった。

女王が親しく手もとに使っていた女房たちで、たとい少しの間にもせよ夫人に後(おく)れて生き残っている命を恨めしいと思って尼になる者もあった。尼になってまだ満足ができずに遠く世と離れた田舎(いなか)へ住居(すまい)を移そうとする者もあった。

冷泉院(れいぜいいん)の后(きさき)の宮も御同情のこもるお手紙を始終お寄せになった。故人を忍ぶことをお書きになった奥に、

枯れはつる野べをうしとや亡(な)き人の秋に心をとどめざりけん

はじめてわかった気もいたします。

とお書きになったものを、院はお悲しみの中でも繰り返しお読みになって、いつまでもながめておいでになった。趣味の洗練された方として、思うことも書きかわしうる方はまだお一人この方があるとお思いになって、院は少しうれいの紛れる気持ちをお覚えになりながら涙の流れ続けるためにお筆が進まなかった。

昇(のぼ)りにし雲井ながらも返り見よわれ飽きはてぬ常
ならぬ世に

お返事をお書き了えになったあとでもなお院は見えぬものに見入っておいでになった。

お気持ちを強くあそばすことができずに悲しみにぼけたところがあるようにみずからお認めになる院はもとの夫人の居間のほうにばかりおいでになった。仏像をお据えになった前に少数の女房だけを侍らせて、ゆるやかに仏勤めをあそばす院でおありになった。千年もごいっしょにいたく思召した最愛の夫人も死に奪われておしまいにならねばならなかったことがお気の毒である。もうこの世にはなんらの執着も残らぬことを自覚あそばされて、遁世の人とおなりになるお用意ば

かりを院はしておいでになるのであるが、人聞きということでまた躊躇（ちゅうちょ）しておいでになるのはよくないことかもしれない。

　夫人の法事についても順序立てて人へお命じになることは悲しみに疲れておできにならない院に代わって大将がすべて指図（さしず）をしていた。自分の命も今日が終わりになるのであろうとお考えられになる日も多かったが、結局四十九日の忌（いみ）の明けるのを御覧になることになったかと院は夢のように思召した。中宮（ちゅうぐう）なども紫夫人を忘れる時なく慕っておいでになった。

底本：「全訳源氏物語　中巻」角川文庫、角川書店
１９７１（昭和46）年11月30日改版初版発行
１９９４（平成６）年６月15日39版発行
※このファイルは、古典総合研究所（http://www.genji.co.jp/）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。
※校正には、２００２（平成14）年１月15日44版を使用しました。
入力：上田英代
校正：柳沢成雄
２００３年10月６日作成